

「柏崎の橋」

22 みなと 港橋

港橋は臨港八坂橋より少し八坂橋寄り、現在の八坂児童公園近くの鵜川に架かっていた。

橋ができたのは昭和6年。それ以前は八坂橋も無く、裏浜と番神を海岸沿いに行き来するには、鵜川橋近くまで迂回する必要があった。このため、鵜川河口に橋を架設することは長年の懸案だった。また、観光客の便益となる渡し舟か橋を設けることで避暑地・海水浴場としての魅力を高め、当時長岡で開催されていた上越線全通記念博覧会に合わせて柏崎を広く宣伝したい、という観光開発的な意味もあった。そこで、柏崎青年団港町支部は地元として奮い立ち、架橋の実現運動を始めた。青年団の面々は有力者を次々と訪問し、寄付金やその他の援助を求めるなど、懸命の活動を行った。この結果、天屋旅館、岬館、岩戸屋、北溟館をはじめ、高橋忠平氏など市内の各方面から多額の寄付が集まり、地元の人々の献身的協力もあって、運動開始のわずか2ヶ月後に橋は完成した。

開橋式は、有力者や寄付者など約三百名が参列、千人以上が観覧するなか、渡り初めや記念撮影が行われた。祝宴会も催されるなど盛大であった。



港橋・八坂橋・鵜川橋
柏崎全図及附近之図（昭和9年）より



港橋（昭和19年7月の洪水時の写真か。）

このとき柏崎青年団港町支部長の柴野氏に贈られた感謝状には、次のように記されている。

「海の柏崎として重要な設備たるは勿論 海岸道路開鑿と上部発展の促進機関たるのみならず 柏崎新風景の随一として 郷土振展上 幾多の使命を有する港橋は この美しき姿となりて 生れ出でたり」

港橋の幅は約1.8mと狭かったため、自動車は通行できず自転車でもすれ違いに苦労するほどであったが、朝夕は子ども達の魚釣り、夏には夕涼みで賑わったという。また最も橋を利用したのは、裏浜で網を曳く中浜・番神の漁師達だったと言われる。しかし後年、維持費の捻出が困難となり、橋の修復ができなくなった。すぐ近くに八坂橋が開通したこともあり、傷んだ港橋は取り壊され、そのままとなってしまった。わずかな期間しか使われなかった橋だが、青年団港町支部の若者達が架橋のため尽力した逸話はいくつもの資料に記されている。そして、今後も語り継がれるであろう。

- 参考にした本
こどものための柏崎物語【正・続】(224 冊) 笹川芳三 著
柏崎の民俗と余録 (382 頁) 山田良平 著
柏崎市史資料集 近現代篇 第3【上・下】(224 K 頁)
柏崎今昔物語 (S28.12.28 柏崎日報掲載記事) 勝田忘庵